

高校生サッカー選手のライフスキルおよび スポーツ組織市民行動と集団凝集性の因果検証

コーチング科学研究領域

5021A049-4 山内 慧

研究指導教員：堀野 博幸 教授

I. 目的

本研究は、高校生サッカー選手を対象に、競技成績やチームワークと親密な関係がある「集団凝集性」に対し、アスリートの競技力や社会生活の基盤となる「ライフスキル」を発端とし、所属チームへの貢献行動である「スポーツ組織市民行動」が媒介となることで正の影響を与える因果モデル（持田ほか，2021）の適用が可能であるか明らかにすることを目的とした。また、年代や性別、競技成績といった母集団間の比較を行い、母集団毎の因果関係の差異や特性を明らかにし、集団凝集性の向上に有用な知見や指導項目の抽出を目的とした。

II. 方法

2022年7月から10月にかけて、日本国内の高等学校サッカー部に所属している高校生サッカー選手を対象にアンケート調査を行った。データの収集は、電子媒体によるWebアンケートと郵送法を用いた紙媒体による質問紙を併用した。データ収集の結果、1946件の有効回答が得られた。

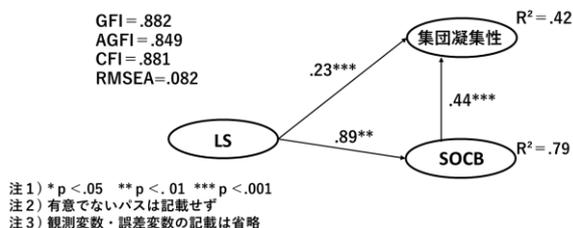
本研究では、競技成績を考慮した集団の比較を行うため、高校サッカー競技における全国規模の大会における成績を集計した。その後、一定の水準の成績を有する高校を「強豪校」と定義し、「対照校」との区分を設け、どちらか単独のデータとならないよう両校に研究協力の依頼を行った。ま

た、全国を6つの地域にわけ、各地域の男女のチームへ研究依頼をおこなった。

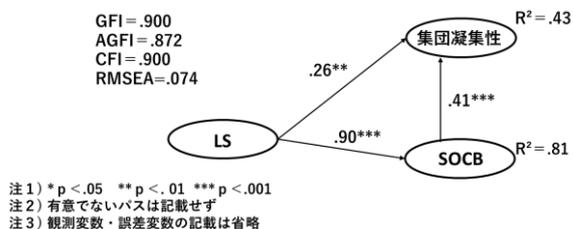
分析に関して、持田ほか（2021）が男子大学生を対象に明らかにした因果モデルを仮説とし、高校生データにおいて適合可能か仮説検証を行った。分析は、相関分析および共分散構造分析を行った。なお、全ての検定は有意水準5%で実施した。また、分析モデルへのデータの適合評価は、持田ほか（2021）と同様に、「GFI」「AGFI」「CFI」「RMSEA」の適合度指標から検討を行った。GFIとCFIは.90以上、AGFIはGFIの数値を越えない範囲で差が小さいもの、RMSEAは.05以下を基準にデータ適合を検証した。

III. 結果

「高校生全体」データおよび「男子強豪校」データにおいて、概念間構造およびモ



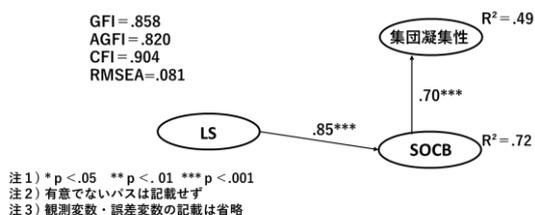
分析モデル1 高校生全体 結果



分析モデル1 男子強豪校 結果

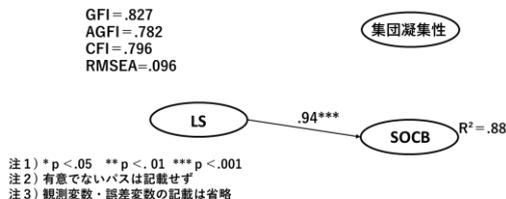
デル適合度指標から、仮説モデルへの適応が支持されないことが明らかになった。

また、「男子対照校」データでは、持田ほか（2021）の明らかにした因果関係をもつ構造が検出されたが、適合度指標が基準を満たさず、仮説モデルへの適応が支持されなかった。

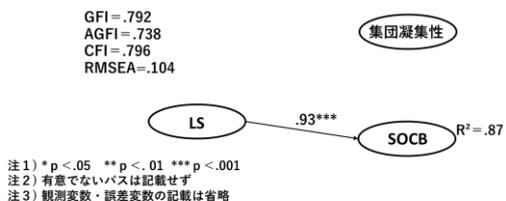


分析モデル1 男子対照校 結果

さらに、「女子強豪校」「女子対照校」の両校とも、「ライフスキル」および「スポーツ組織市民行動」の両概念と「集団凝集性」との間に因果関係は検出されなかった。



分析モデル1 女子強豪校 結果



分析モデル1 女子対照校 結果

このように、高校サッカー選手全体データおよび競技水準と性別で群分けを行った母集団データのいずれにおいても、持田ほか（2021）が明らかにした因果モデルの適合が、モデル構造および適合度指標から、支持されないことが明らかになった。

そのため、性別や競技成績といった母集団間の比較による集団に応じた「集団凝集性」向上に有用とされる指導項目を抽出するに至らなかった。

IV. 考察

仮説が支持されなかったため、先行研究（持田ほか，2021）との比較を行った。仮説モデルは、持田ほか（2021）による研究と同一のモデルを使用し、同種目選手のデータに対して検定を行ったが、適合に至らなかった。そのため、対象が高校生と大学生であることによる年代の差、つまり、発達による影響が示唆された。加えて、先行研究の大学生男子と本研究の男子高校生のデータに類似点が存在することから、高校生年代において、仮説モデルに対して、適合段階である可能性が示唆された。

また、本研究による知見として、男子チームデータにおいては、要因として用いた変数から集団凝集性への影響が検出されたが、女子チームデータにおいて、集団凝集性への影響が検出されなかったことが挙げられる。そのため、集団スポーツ競技における集団凝集性研究の際に、男女間の母集団分けが必要となる可能性が示唆された。

さらに、女子チームにおいては、集団凝集性への影響が本研究で用いた変数では検出されなかったが、相関分析において、正の相関関係が観測されたことから、他変数による媒介効果の可能性が示唆された。

これらのことから、今後は、同一の選手の変数の変化を追う縦断研究や各概念の測定値の向上が見込めるプログラムや指導を実施するといった介入研究を行い、概念間の構造やモデル適合度の変化を検証していくことで、集団凝集性の要因および因果関係の探索が可能である。また、男女の母集団分けの必要性について、女子チーム独自の集団心理について検証を行うことで、集団凝集性の要因や因果関係の解明への助力になることが示唆された。